

令和元年6月29日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02152

研究課題名(和文) ラグーザの未公刊史料を通してみる近代イタリアにおける美術・工芸を巡る状況の研究

研究課題名(英文) Study on the arts and crafts in modern Italy through Ragusa's unpublished manuscripts

研究代表者

河上 真理 (KAWAKAMI, Mari)

京都造形芸術大学・芸術学部・教授

研究者番号：20411316

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：明治9年工部美術学校の彫刻教師として来日したヴィンチェンツォ・ラグーザは滞日中、故郷パレルモ市に美術・工芸学校の設立を企図し教育活用を目的として古美術品を蒐集した。同市立図書館所蔵のラグーザの未公刊手稿を、妻清原玉による《古器物写生画》、現存する蒐集品と合わせて研究した結果、彼は蒐集を進める中で茶の湯文化への造詣を深め、茶の湯文化が日本の美術・工芸の発展に寄与し、経済効果も上げたという歴史観を得、これをパレルモの学校において応用しようとしていたことが明白になった。本研究により、19世紀から20世紀初頭の欧米諸国にも見られた、美術・工芸による経済振興という方向性は近代イタリアにおいても確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

故郷に企図した工芸学校、教育活用を目的とした滞日中の古美術品蒐集は周知のことだったが、十分な検討はなされてこなかった。本研究により、パレルモ市立図書館所蔵のラグーザの未公刊手稿の調査分析をし、古美術蒐集は茶の湯文化に伴う美術・工芸の発展、その経済効果の歴史への関心があったこと、故郷に企図した工芸学校には同様の期待が込められていたことが明白になった。本研究により、19世紀から20世紀初頭の欧米諸国に顕著な美術・工芸による経済振興という指向性は近代イタリアにおいても確認できた。また、これまで十分な検討がなされてこなかったイタリアにおけるジャポニスム研究も、本研究によってその地平を開くことができた。

研究成果の概要(英文)：Vincenzo Ragusa, who came to Japan in 1876 as a professor of sculpture in the Kōbu Bijutsu Gakko (Imperial Academy of Fine Arts), collected Japanese antiques for establishing a school for arts and crafts at Palermo where is his home town and using them in this school. I studied Ragusa's unpublished manuscripts preserved in the Palermo municipal library contrasting with existing Ragusa's antique collections and pictures Kokibutsu-shaseiga (sketches of Ragusa's collection of antiques) drawn by his wife Tama. By this study it has turned out that Ragusa got to have a deep knowledge on Japanese tea ceremony culture and became to have a historical view that it contributed to the development of Japanese arts and crafts and also to the economic promotion.

In this research I have made sure that modern Italian arts and crafts also had a phase of economic promotion which European countries commonly had in 19th and 20th centuries.

研究分野：美術史

キーワード：ヴィンチェンツォ・ラグーザ パレルモ 美術 工芸 清原玉 古器物写生画 ジャポニスム 近代イタリア美術

## 1. 研究開始当初の背景

「美術」概念のゆらぎに呼応し、美術の枠組と社会的役割を意識した研究が活発化して久しい。美術という言葉の成立と美術の制度や政策を巡る史的研究が蓄積されている状況は、日本はもちろん欧米各国においても同様である。イタリアにおいても、イタリア王国の形成と美術との関係に着目した研究が進みつつあった。また、美術教育に関する研究や、欧米諸国との直接的関係からの再読もなされてきていた。

研究代表者は、イタリアの美術アカデミーとその影響下に誕生した日本初の官立美術学校である工部美術学校の研究を通して、「美術」の政治性と社会的有用性につき考察を重ねてきた。同校へ教師を派遣したイタリア側の公文書を元にその位置付けを全面的に見直した博士学位論文『工部美術学校研究』では、日本側が「百工ノ補助」を目的として企画した同校を、イタリア側が美術アカデミーとして理解したという、両者間の齟齬を明らかにし、同校が美術と工芸技術の狭間に在ったことを示した。また、イタリア王国が工部美術学校の設立において、「美術」を政治・外交上の有効手段として用いたことを明らかにし、「美術外交」という概念の提唱へと展開させた。この研究は、日本近代美術史における美術・工芸を巡る問題が、世界との同時代性において考察されるべきことがらであることを提示することになった。しかし逆に言えば、この問題がこれまで日本において世界史的視野で語られてはこなかったことも意味している。

こうした視野に立って日本近代の美術・工芸を再考するための素材として、申請者は工部美術学校彫刻教師であったヴィンチェンツォ・ラゲーザが残した未公開の手稿に注目した。このラゲーザの未公開手稿は、故郷パレルモの市立図書館及びローマの公文書館等に所蔵されている。前者所蔵の265件に分類された手稿は、彫刻家としての事績に加え、シチリア史、宗教・習俗など多岐に亘っているが、日本及びイタリアの美術・工芸に関するものを多数含んでいる。手稿は文字通り手書きのものとタイプ打ちされたものがあるが、いずれもイタリア語である。

研究代表者はかつて、これらの手稿の中から、ラゲーザが設立した工芸学校に関する研究を行った。その結果、彫刻家であるラゲーザが「美術」だけでなく、「工芸」に注力しようとしていたことを知った。つまり、これらの文書が19世紀に起こった美術と工芸に関する具体的な問題を読み解く手がかりとしての性格を有していることを認識することに至った。

近年、イタリアにおいてもラゲーザの事績に関する新たな研究成果が相次いで公開されていたが、そのいずれもがパレルモに現存する手稿については言及していなかった。つまり、同手稿は等閑視されていたのだが、近代イタリアにおける美術・工芸を巡る状況を考察する上で極めて有効な史料であり、また翻って日本における美術・工芸を巡る問題を考察するための手がかりとなる可能性が極めて高いと考え、本研究において、本格的に本手稿の研究に着手することになった。

## 2. 研究の目的

本研究は近代の日伊関係を通して「美術」の概念とその社会性を再考する研究の一環として実施するものである。近年、日本近代美術史を欧米諸国との直接的関係から再読する試みがなされつつあるが、未だ世界史的視野で考察されているとは言い難い。本研究では、工部美術学校教師として明治初期に6年間日本に滞在した彫刻家ヴィンチェンツォ・ラゲーザが残した、上述のパレルモ市立図書館所蔵の未公開史料を総合的に分析し、19世紀から20世紀初頭におけるイタリア美術と工芸をめぐる状況を生きた史料から描出することを試みた。ラゲーザという人物を採り上げることで、近代イタリアの状況に留まらず、日本近代における美術・工芸を巡る状況を世界史的視野に位置付けて考察する糸口が与えられることが期待された。

具体的には、ラグーザの手稿を手がかりとして、ラグーザの事績を日本、イタリア両国の文脈から再読し、近代イタリアにおける美術・工芸の関係について新たな視点から分析することを目指した。欧米と日本との接点を具体的に論じることのできるラグーザという人物を通して、日本近代における美術・工芸を巡る状況を世界史的視野に位置付けて具体的に考察する糸口が与えられると考えた。

### 3．研究の方法

研究方法としては、パレルモ市立図書館所蔵のラグーザ手稿という一次史料の総合的読解を根本におき、これを土台として研究を進めた。ラグーザの手稿のデータベースの作成、手稿の翻刻及び翻訳、同時代文献資料（書籍、新聞、雑誌など）の博搜及び、そのデータベースの作成を行った。同時に、ラグーザと同時代のイタリアにおける美術・工芸振興に関する文献資料及び、関連作品の詳細調査・分析を行い、以上の調査を踏まえて近代イタリアにおける美術と工芸を巡る状況の世界史的視野からの総合的な把握・理解に努めた。

近代イタリアにおける美術・工芸を巡る状況を再検討しつつ、ラグーザの未公刊手稿を取り上げ、ラグーザの事績を日本及びイタリア両国の文脈から再読した。その結果を踏まえて、近代イタリアにおける美術・工芸の関係について新たな視点から分析することを目指すとともに、日本への影響を検討した。

### 4．研究成果

研究期間内に行った講演、学会発表、論文のうち、主要な研究成果3点の概要を記す。

2016年11月13日、東京イタリア文化会館におけるシンポジウム「イタリア研究者の日（Giornata degli italianisti）」テーマ「イタリア語と創造性：ブランドと風俗、ファッションとデザイン（L'italiano e la creatività: marchi e costumi, moda e design）」において、「*Vincenzo Ragusa e l'arte giapponese, su fonti inedite*（未公刊史料によるヴィンチェンツォ・ラグーザと日本美術）」をイタリア語で発表した。その内容はイタリア文化会館のweb上で一般公開されている。その概要を以下に記す。

ラグーザは日本に滞在していた時期から、故郷パレルモに工芸学校を企画していたこと、そこでの教育活用を目的として古美術品の蒐集をしていたことは周知のことだったが、十分な検討はなされてこなかった。

パレルモ市立図書館所蔵のラグーザの未公刊手稿の中から見出した日本文化に関する文書を取り上げ、検討を加えた。ラグーザは日本の古美術品蒐集を進める中で稲垣休叟（1770-1819）の『茶道筌蹄』などの茶道書にも触れる機会があったこと、それにより茶の湯文化史全般への造詣を深めたこと、茶の湯文化の展開に伴い美術・工芸が発展し、経済効果も上げていたという歴史観を抱き、これを尊んでいたことを明らかにした。ラグーザは故郷パレルモに設立した美術・工芸を教育する学校においても、美術・工芸による経済振興を期待していたと推察できることを明らかにした。

2017年6月9日、シチリア州パレルモ市パラッツォ・サンテリアにおけるシンポジウム「ヨーロッパにおけるユートピアとしての日本（L'utopia del Giappone in Europa）」において、「L'esperienza giapponese di Vincenzo Ragusa come insegnante, scultore e collezionista（教育者、彫刻家、蒐集家としてのヴィンチェンツォ・ラグーザの日本経験）」をイタリア語で発表した。現在シンポジウム報告書は制作中であるが、2019年度内には公刊されるはずである。

本シンポジウムは、ラゲーザとその妻の清原玉の事績や作品を中心とした大回顧展「清原玉とヴィンチェンツォ・ラゲーザ 東京パレルモ館の橋(Mostra 0' Tama Kiyohara e Vincenzo Ragusa un ponte tra Tokyo e Palermo)」(於パラッツォ・サンテリア、5月12日～7月28日)に併せて開催されたものである。期せずして本研究代表者も本シンポジウムにおいて、それまでの研究成果の一端を裨益する機会を得ることができた。その概要を以下に記す。

1876(明治9)年、工部美術学校の彫刻教師として来日したヴィンチェンツォ・ラゲーザの6年間の日本滞在経験が彼に何をもたらしたのかを考察した。教育者として西洋彫刻を教える中で、イタリアやパレルモの文化や歴史も教えたこと、彫刻家としてもさまざまな制作をするなかで西洋彫刻がどのようなものであるかを日本社会に示した。当時、日本の古美術蒐集した外国人は複数いた中で、ラゲーザが進めた古美術品蒐集の特殊性、つまり、故郷パレルモに工芸学校を企図し、そこで教育活用を目的としていたという独自性を指摘した。

日本滞在中の以上3点の一見異なる活動は、彫刻家としてのラゲーザという原点に立ち返って再度考察してみると、全てが繋がってくることも指摘した。

2018年8月4日、明治美術学会第2回例会(於：京都工芸繊維大学)において「未公刊史料によるヴィンチェンツォ・ラゲーザの日本の美術・工芸観」を発表した。本発表の内容については、論文投稿すべく執筆中である。

本発表では、パレルモ市立図書館所蔵のラゲーザの未公刊手稿を、妻清原玉による《古器物写生画》、現存する蒐集品と合わせて考察した。

日本においてはこれまで全く言及されてこなかったが、《古器物写生画》の裏面には記述があること、その記述はラゲーザによるもので、古器物が売り立てされた際にも参照された事実と言及した。また、玉による《古器物写生画》は東京国立博物館(旧、東京文化財研究所)所蔵の22点のみならず、パレルモの「ヴィンチェンツォ・ラゲーザ、清原玉」国立美術高校所蔵の31点、さらに不明もしくは個人蔵と考えられる2点の合計54点が存在することを明らかにした。

ラゲーザの日本美術・工芸品コレクションは、独自の視点をもって蒐集がなされていたと結論づけた。

研究期間内に、本研究全体を総括する論文を公刊するには至らなかったが、公表すべく現在準備中である。その内容は、ラゲーザの事績の総合的解明、ラゲーザがパレルモに企図した工芸学校のために準備した教材を通して、近代イタリアにおける美術と工芸を巡る状況の解明、近代日本における美術・工芸を巡る状況の世界史的視野から位置付け、「美術」の概念とその社会性の再考。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Mari KAWAKAMI, *L'esperineza giapponese di Vincenzo Ragusa come insegnante, scultore e collezionista*, a cura di Carmelo Bajamonte e Maria Antonietta Spadaro, "L'utopia del Giappone in Occidente" per i tipi delle Edizioni *Torri del vento di Palermo*, 2019.

Mari KAWAKAMI, *Vincenzo Ragusa e l'arte giapponese, su fonti inedite*, "Atti della Settimana della lingua italiana nel mondo 2016. L'italiano e la creatività: *marchi e costumi*,

moda e design”, Istituto Italiano di Cultura - Tokyo, 2017, pp. 15-19 (ISBN 978-4-901955-04-1). ([http://www.iictokyo.com/ryugaku/settimana/2016\\_ebook/index.html#](http://www.iictokyo.com/ryugaku/settimana/2016_ebook/index.html#))

〔学会発表〕(計 6 件)

2019年6月8日、第43回地中海学会大会地中海トーキング「港町：交流と創造」(於：神戸大学)「ヴィンチェンツォ・ラグーザと清原玉 - イタリア、日本、そしてパレルモへ - 」を発表。

2018年8月4日、明治美術学会第2回例会(於：京都工芸繊維大学)において「未公刊史料によるヴィンチェンツォ・ラグーザの日本の美術・工芸観」を発表。

2018年7月28日、佐賀県立名護屋城博物館主催 明治維新150年記念企画展「高橋是清と辰野金吾 唐津藩洋学校耐恒寮をめぐる人々」関連特別講座(於：旧唐津銀行)において「辰野金吾のグランド・ツアーと 美術建築」を発表。

2017年7月8日、Art-Architectureの今を考える-『辰野金吾 美術は建築に応用されざるべからず』日本建築学会著作賞受賞記念シンポジウム(於：京都造形芸術大学)において「辰野金吾と 美術建築」を発表。

2017年6月9日、シチリア州パレルモ市パラッツォ・サンテリアにおけるシンポジウム「ヨーロッパにおけるユートピアとしての日本 (L'utopia del Giappone in Europa)」において、「L'esperienza giapponese di Vincenzo Ragusa come insegnante, scultore e collezionista (教育者、彫刻家、蒐集家としてのヴィンチェンツォ・ラグーザの日本経験)」をイタリア語で発表。

2016年11月13日、東京イタリア文化会館におけるシンポジウム「イタリア研究者の日 (Giornata degli italianisti)」テーマ「イタリア語と創造性：ブランドと風俗、ファッションとデザイン (L'italiano e la creatività: marchi e costumi, moda e design)」において、「Vincenzo Ragusa e l'arte giapponese, su fonti inedite(未公刊史料によるヴィンチェンツォ・ラグーザと日本美術)」をイタリア語で発表。

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。